

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(18) 平成13年3月1日

農政・救荒シリーズ

大蔵永常と『のうかこころえくさ農家心得草』(Q616-2)

「それ天国をとま富しむるの経済八、まずかみん下民をにぎは振し、しかうし而て後に領主の益となるべき事をはかるなる成べし」という民衆の立場に立った発言は静岡県にゆかりの深い農学者、農政者の大蔵永常の言葉です。彼は、それまでの領主の道徳心で治める徳治政治という考え方を取らず、領主の利益よりも個人の利益を優先させるという考え方をとり、高く評価されています。

明和5(1768)年豊後の国に生まれた永常は多くの著作を残しました。農村を広く見てまわり、優れた技術や商品作物を見いだしてその普及を図ろうとするところに、家や村を基盤に考えるその当時の他の農学者と一線を画すところがあります。また、農民にとって有益な書物であれば若干の手を加えて刊行し、自らの著作も繰り返し利用して、本を刊行していきました。出版費用が非常に高い当時、永常はなるべく安い価格で民衆のための農書を民間に普及させることを主眼に置きました。彼が江戸期の農業ジャーナリストと言われる理由です。

当館久能文庫には永常の救荒書『のうかこころえくさ農家心得草』(Q616-2)の写本が所蔵されています。本書の内容は大きく2つに別れています。飢饉時の食糧となる麦の栽培とその備蓄に関する前半部分と、飢饉時に有毒植物を食べて死亡したり、病気になる人が出るのを避けるために、有毒植物を紹介した後半部分です。

当時、麦作の拡大を主張した農学者は非常に少なく、永常は「麦八米とちがひ、年毎に豊凶八すくなきものなり。」という理由だけではなく、加えて麦は米に比べ換金されにくく、比較的長期間貯蔵され、飢饉時には大切な食物となり、それが大きな利点であると評価しています。多くのページを割いて、麦を貸し付けた際の利子のデータ分析もおこなっています。また、麦の花の顕微鏡図(宇田川榕庵の弟子の花井一好はないかつよしの作図からの引用)をあげて説明し、麦の雌雄説を批判しました。麦栽培法では大阪周辺で行われている二挺掛という小型の鋤を二つつないだものを紹介しています。

後半部の図説では、尾張藩士清原重巨きよはらしげたかの『ゆうどくそうもくず有毒草木図』から毒性の強いものを選び掲載し、その目的も餓えのために毒のあるものを誤って食べないようにとっています。永常が他人の著作を含め、手近で有用な材料を使い、緊急に飢饉に対処しようとしたところが『農家心得草』からも充分うかがわれます。

なお、当館には大蔵永常直筆の書状が貴重書(S092.3-11)として4通保管されています。その内の一つは同じ愛民の精神を持つ、大塩平八郎の反乱を伝える書状です。

【参考文献】

『日本農書全集』第14巻・第18巻・第68巻(610.8/11)

「農村の復興運動と民衆宗教の展開」宮田登

『岩波講座日本歴史13』(211.8/31)所収

「合理的農業思想の形成」飯沼次郎

『化政文化の研究』(215/163)所収

『大蔵永常』早川孝太郎(K347/1326)